

# 登園拒否児と幼稚園の先生

玉井 収 介

登校（登園）拒否という問題は、五、六年前から注目されるようになってきた新しい問題である。わが国でのもっとも早い研究が出たのは昭和三五年ごろであろう。

ここでいう登校（園）拒否というのはつぎのような条件が必要である。まず第一に、子どもの心身に欠陥がない、ということである。ちえのおくれとか、身体の欠陥とか、病気とか、そういう事情があつて休むということはよくあることだし、何もあたらしい問題ではない。そういう子どもも登園拒否にはちがいないが、最近問題になっている登校（園）拒否の中にはかぞえない。

つぎに、家庭の事情で行かれないものも除外する。わが国では九年間の義務教育がしかれているが、ごくわずかであるが、

家庭の無理解や貧困から学校へ行かれない子がいる。幼稚園は義務制ではないから、家庭にその気がなければ行かせないこともありうる。このような理由から行かないものももちろんふくまれない。だから、親の方が行かせたいと考えているのに行かないという子のことである。

もう一步すすめていえば、登園しないことを問題であると親が——場合によっては、例は少ないが、子ども自身が問題であると——感じていること、をいう条件を三つ目の条件としてあげてもいいであろう。

学校恐怖症というような用語を用いるときはこの三つ目の条件が大切になってくる。しかし、幼児では、子ども自身が、登園できないことに問題意識をもっていることは少ない。だから

幼児では、幼稚園恐怖症などという用語は用いないのが普通であらう。

このような条件にあって、しかも学校や幼稚園に行きたがらない子が最近かなり急速に増えているらしいのである。

さて、この問題が気づかれはじめたから、わが国で発表された研究だけでも、ここ数年の間に四〇以上になったといえるであらう。そして、多くの研究がつかさねられるにつれて、一口に登校拒否といってもその中にはいろいろの類型のあることがわかってきた。研究者によってその類型のわけ方はいろいろで、まだ今の段階では統一された結論には達していない。

われわれもこのテーマに関心をもってから三回ほど論文を発表してきたので、ここでは、われわれの見解を中心にしてのべさせてもらうことにする。

われわれは、大体三つぐらいの類型をかんがえている。第一は、分離不安グループとよぶものである。これは、小学校の低学年、あるいは幼稚園で発生することが多い、ごく簡単にいえば、非常に甘やかされた育て方をされた子どもで、親からはなれることに不安を感じ、親の方も子どもをはなすことに不安を感じて、おたがいくつついているものである。だから一人っ

子などの場合が相当多いし、祖母がいる家庭のわりあいも多い。幼稚園の場合は、かわいそうだというので止めてしまつて、

表面化しないこともある。学校は止めるわけにはいかないからそこで表面化する。低学年に多いのはそのためである。だから逆に、親がつきそつていけば登校(園)することもある。もう一つの共通な特徴は、登校できないことに問題意識がないことである。行かなければならない、という課題意識、あるいは義務感というものが形成されていないといつてもよい。だから休んでもいいということになると平気である。

第二のグループは、恐怖症という言葉を使うならばそれにふさわしいものである。この子どもたちは、ある学年までは、むしろ優秀な成績で登校しているものである。だから、小さくても小学校の高学年ぐらにはなつていく。そして、学校へ行かなければならないこと、成績もよくやりたいこと、につよい意識をもっている。むしろその意識がつよいために、思うような成績があげられなかったり、学級委員の責任が果せなかったりすると、それを苦にしてなやむ、登校できなくなってくるものである。

だから、行かないでうちにいるとイライラして人に当たったり

するし、友人が学校に行っている時間は外出しないものが多い。床屋などにもいかないし、ひどい場合には、友人の下校の時間になると、雨戸をしめてかくれてしまったりするものもある。

あき登校する時間には、頭痛や腹痛などを訴えることもある。これは仮病ではなくて本当にいたむのではあるが、多くは心理的なものである。つまり、行かなくてはならないと思いつつ、行けないのであるから、頭痛などの、休む理由があると、それだけ休むことへの心理的な負担がかかるのである。いわば、病気に逃げこむといってもよいであろう。だから、一日中いたむなどということはなく、昼ごろになればなおつてしまったり、休日にはいたみがおこらないことが多い。

三番目のグループはまたちがっている。これは、完全に男の子ばかりで、家庭は父親が欠けていたり、いても影のうすい父親であることが多い、そのわりには経済的には困らないことが多い。

つまり、一家を支える働き手としての父親のあり方、というものを子どもが見失って育ってきた、とでもいえる場合である。

だから、学校でも、行かなければならないという意識はよく、はじめから多少の問題をはらみながら登校している。そしてある時期までは通学するが、だんだんむずかしくなると、休み出したり、また行ったり、転校してみたり、という状態になり、とうとうダメになってしまう。だから年令の高い子に多い。

父親の仕事というものは、外の世界に多いから、子どもからみて何をしているのかわからないことが多い。会社に行ってお仕事するのだ、とはわかっていても、具体的には、母親の仕事のようにわからない。そして、案外、いこいの場である家庭ではドラシがないところをみせている。ただ、その父親が権威をもっているのは、それが仕事により給料を得てかえり、それで、一家を養っているからである。

それが、父親がなかったり、あっても影がうすかったりして、その働きに依存しなくても生活がなりたつ、などという場合には、父親のだらしない面ばかりをみてしまうことになる。そして、その役割がもつ反面の苦しみのようなものは身につけない。だから、学校も行ってもいかなくてもいい、というようなかまえになっていくのである。

さて、以上の説明でもわかるように、幼稚園の年令でみられるものとすれば、第一の分離不安のグループである。

もっとも、こういう型の甘えっ子の程度のかるいものは毎年入園後まもないころにはそう珍しくはない。親からはなれられなくて泣いている子というのは四月早々には一人や二人はいるものである。それでも、親の方が、何とかなれさせなければならぬと考えていけば一週間、二週間とつづくとだんだんはなれて一人でいられるようになっていくが多い。

親の方もかわいそうだの一念で、家へかえろうともしないとか、幼稚園を止めてしまおうかという場合が、この問題に発展するのである。

今までのこの問題についての研究は、多くは家庭の問題ばかりをとりあげて、学校や幼稚園側のことはあまり考えていなかった。この点については、最近では反省がなされており、今後はこの方向にも研究がすすめられるであろう。

だが、さしあたってこのような子どもがいた場合、どう処置したらいいであろうか。

まず大切なことは、子どもよりも、母親の方に、不安でもかわいそうでも一人で幼稚園の生活になれなければならないこ

と、それは、四才、五才になった子どもにとって、当然必要なことなのであるということをお納得させることである。それを幼稚園を止めてひきもどっていつてしまったらしては、幼稚園に無事に適応した子どもとの間のひらきは大きくなる一方で、学校へ行く時期になっては、ますます扱いにくくなることなどを説得していく必要がある。この型の子どもの母親は、極端な溺愛、保護が多く、それが、子どもの自主性、社会性の発達をそこなっていることに気がついていないものが多いのである。

だから、母親への働きかけがなければ、この型の子どもの問題の解決はまず無理といえるであろう。

子どもに対しては、みているだけでも、帰っていつてしまふよりはいいのであるから、少しづつでも仲間に入れていくことを考えるのがいいであろう。ある時期までは、母がついてくることをみとめてもよい。そして、母親への説得をつづけながら徐々にはなれられるようにしていく。

母親が途中から、家へかえるような場合、子どもにことわらずに、しらないうちにかえってしまうことはよくない。あとからそれを知った子どもは、かえって不安をまして次にはよけいはなれなくなるものである。

(国立精神衛生研究所)